

ると、非常に多くの技術が存在すると考えられるが、大きくはこの3つの技術に代表されると考えられる。

次に、個々の石器の消長とこれら3つの技術との時期的な関わりについて述べたい。

Ⅱ期については詳細な分析ができないため割愛する。Ⅲ期は寸詰まり剥片を利用する石器として台形石器、切出形ナイフ形石器がある。三稜尖頭器については、現段階でははっきりしない。縦長剥片を利用する石器は剥片尖頭器、基部加工ナイフ形石器があり、三稜尖頭器も大型の製品については可能性がある。基部加工ナイフ形石器についてはⅡ期には存在しないため、Ⅲ期になる段階で縦長剥片剥離技術を利用して派生してきていると考えられる。横長剥片を利用する石器は国府型ナイフ形石器、今峠型ナイフ形石器、大型の三稜尖頭器である。この時期に瀬戸内からの影響があったことを示している。

Ⅳ期になると横長剥片を利用していた大型の三稜尖頭器の一群が消滅するため、横長剥片は国府型と今峠型の2種類のナイフ形石器だけとなる。よって三稜尖頭器は小型化に伴い寸詰まり剥片剥離技術に吸収される。筆者は、先述した前原和田遺跡XⅢ層にみられる「三稜ナイフ」については、ナイフ形石器素材の寸詰まり剥片剥離技術に三稜尖頭器の製作技術が吸収された結果、一時的に生まれた石器であると考えている。よってこの時期あたりの特徴的な石器として今後注目していきたい。なお、縦長剥片は剥片尖頭器が消滅するため基部加工ナイフだけが残る。寸詰まり剥片は引き続き利用される。

Ⅴ期以降は各器種間の技術の変化・融合はみられないが、前章で述べたとおり、全体的に小型化していく。横長剥片

剥離技術はⅥ期で消滅する。縦長剥片剥離技術については小型化に伴い特殊な技術という認識は薄れていくと考えられる。即ち、大型の縦長剥片を連続して剥ぐ必要があったⅢ、Ⅳ期ほどには石核の準備等において特殊性がなくなったと考え、いわゆる石刃技法と呼べるようなものではなく、単に小型の縦長剥片を剥離する技術へと移行していくと評価したい。

以上に述べた石器製作技術の推移についての概念図が、第14図である。

6 石器の小型化について

ナイフ形石器文化期において時期が下るにつれて石器が小型化する、という事象がよく言われるが、筆者もこれまでの論考、本稿含めてよくこの言葉を使用する一人である。そこで、本章ではこれまで筆者が見た目の感覚で述べてきた「石器の小型化」について、実際の数値データを基に実体について検討していきたい。ここでは、時期を通じて比較的資料のまとまっている三稜尖頭器、基部加工ナイフ形石器、台形石器を例にとって石器の小型化についてみていきたい。なお、分析資料は基本的に完形品を対象としているが、先端部のわずかな欠損等、無理なく復元可能な場合は、一部推定値を使用している。

(1) 三稜尖頭器

① Ⅲ期 小牧3A遺跡(第15図)

対象資料は8点である。6cmを越す製品が1点と、2~4cmの製品が7点である。本遺跡の石器群は以前から指摘しているように2時期に分けられる可能性が高く、第2章でも述べたとおり、三稜尖頭器も2時期に分けられる可能性

VI										
V									変質	小型化
IV										
III										
II										派生
器種	国府ナイフ	今峠ナイフ	三稜尖頭器	台形石器	切出形ナイフ	三稜尖頭器	三稜尖頭器	剥片尖頭器	基部加工ナイフ	
技術	横長剥片剥離技術		寸詰まり剥片剥離技術			縦長剥片剥離技術				

第14図 ナイフ形石器文化後半期の石器製作技術の推移概念図